慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シャルル・バルバラ『赤い橋の殺人』（その一）
Sub Title	Charles Barbara : L'Assasinat du Pont-Rouge I (traduction et notes)
Author	Barbara, Charles(Kameya, Nori) 亀谷, 乃里
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.47 (2008.) ,p.91(20)- 110(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20080930-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シャルル・バルバラ『赤い橋の殺人』（ポン・ルージュ）[1]（その一）

亀谷　乃里　訳・註

一　二人の親友

四月の陽光に溢れる明るい室（へや）で、二人の青年が昼食を取りながら閑談していた。側に並ぶと、二人は驚くばかりのコントラストをなしていた。年下の青年は、一見虚弱（ひよわ）ではあるが、金髪で非常に鋭い眼、毅然たる性格を示す彫りの深い目鼻立ちをし、もう一人は、まだばら色の頬と、褐色の毛髪の茂みをもち、ささいなことで落胆し挫折する優柔不断な人間に特有のあの悩ましい眼つきをしている。金髪の青年は褐色の毛髪の青年に向かってロドルフ[2]といい、こちらは青い眼の青年をマックス[3]―その正しい名前はマクシミリヤン・デストロワ[4]である―と呼んでいた。二人は幼年時代と中学時代（コレージュ）の友人で、文学について閑談していた。意気消沈し、慰めを期待して友人に会いに来たロドルフは、芸術家生活の様々な見込み違い、苦渋、花咲かぬ薔薇の棘についてくどくどと述べていた。

逆にマックスはこうした憂鬱を煽って楽しんでいるように見えた。

「いみじくも、豊かに実のなる果樹に喩えられるああした希に見る選ばれた人々の作品は別として、」彼はいっ

た、「芸術作品とは、一般に障害物の娘なのだ、とりわけ、苦悩の娘なのだ。だからといって幸福が天才を不毛にするという積もりはない。けれど、僕の確信するところでは、大多数とはいわなくとも、多くの優れた人々が現在あるのは、彼らにさし向けられた軽蔑とか足元に播き散らされた数々の妨害、一言でいえば、何らかの苦痛に負っているのだ。」

ロドルフは他の多くの人々に倣って、芸術とは、せいぜい、肉体を責め苛み精神を腫れ上がらせる欲望と虚栄心とを満足させる一手段にすぎないと考えていた。だからこの種の信条表明は、文字通り首とネクタイの間に入ったいら草であった。情けない顔をして交互に自分の帽子と扉とを眺め、サン・ギーのダンス[5]で両側から引っ張られる子供のように揺れ動いていた[6]。

マックスの収入源は今のところ三流劇場のオーケストラの第二ヴァイオリンの地位だけに限られていた[7]。貧窮は苛立ちもいささかの反抗心も起こさせなかった。それどころか、自らのうちに優れた書物の芽を蔵しているという心地よい得信の中から、自身と将来とに確信を持つ人間の英雄的な忍耐を汲み取っていた。貧困に対して極端な嫌悪も熱狂ももたず、それを有益な一時的悪と見なしていた。そして多くの友人の大いなる顰蹙を買ったことには、貧困を魂と諸能力の鈍麻に対抗する強力な刺激剤であると見なしていた。マックスはロドルフの身振（パントマイム）を完璧に理解していた。だがそれでも続けた。

「だから、詩人の苦悩をあってはならないことのように嘆いたり、その苦悩の再発を緊急になくす必要性について話したりするのを聞くと、僕は苛立ちを感じずにはいられない。『それは逆説（パラドックス）だ。それは、もっと重大ないくつもの誤りの責任を負わなければならない社会を弾劾する種となる』といった説を主張して来た人々には申し訳ないが。要するに、苦悩のない人は永久に凡庸な人間にしかならない。中間はない。選択しなければならないのだ。ぼけっと突っ立っている木偶（でく）の坊か、無為に生活する草木のようなものか、ヘボ芸術家か、さもなくば苦

悩するかを……」

どう見ても、ロドルフはしびれを切らしているようだった。恐らく彼の我慢は尽き果てたのだろう。折りしも人と会う大切な約束を思い出し、びっくり箱の玩具さながらぴょこんと立ち上がった。だが室を出るとき、階下で響くピアノの音にはっと立ち止まり、こんな風に和音を転がしているのは誰なのか、と尋ねた。

「僕が一緒に音楽をしてるある御婦人だよ。」とデストロワがすかさず応答した。

「彼女きれいかい。」

滑稽に見える程熱心に、口籠りながらされたこの質問に、マックスは驚きの眼射を友人に注ぎ、次にややあって、頭を傾げて夢見るようにいった。

「君は僕より気になるんだね、そのことにはまだちっとも注意してなかった。たとえばその女性が稀に見る優雅さそのものだってことを知ってるし、その顔立ちを僕が限りなく好きだってことも知ってる……」

ロドルフはすでに立ち去ることを忘れ、見知らぬこの女友達についてもはや留まるところを知らずにデストロワに話していた。マックスは、この女性が寡婦で、ピアノの教師をしていて、母親と一緒に暮らし、母娘は毎日フレデリックという名の老人の訪問を受けていること、この老人は母娘の意のままにすべてを捧げているらしい、ということを手短かに答えた。

「僕は彼女達が金に困っているのがわかったんだ。」マックスはつけ加えた、「それで、内緒でそっと弟子を見つける努力をしてるんだ。」

「その女性達は何ていうんだい。」

「これが名前だ、あるいは少なくとも娘の名前だ、」とマックスはテーブルの上の名刺を取り上げていった。

「ティヤール・デュコルネ夫人。」

ロドルフは眼を皿のように見開いて、すでに開(あ)けかけている扉から室(へや)の中央に戻った。

「ああ！」彼は一気呵成にいった、「君が新聞を読んでいないのは一目瞭然だ。でもともかくあの後家さんの旦那の名前だけは知ってるようだ。証券仲買人なんだ。ある朝だか夕方だかに、セーヌ河から引き揚げられたんだ、そんなに前のことじゃない。そのニュースは、幸いにも、かなり物議をかもしたんだ。というのも、故人の金庫で百万以上の不足が発見されたのだ。この男、証券取引所(ブルス)とブレダ街[8]の二つの壷に両股かけて、それこそ本物のサイフォンだったんだ。一方で黄金を吸い上げてもう一方に注いでたんだ……」

マックスの顔は深い驚きを表わしていた。

「それは奇妙だ！」マックスはいった、「何か不吉な秘密を十分予感はしてたけれど、いわれなければそんなに恐ろしいこととは想像もしなかっただろう。」

「ちょっと待って、」ロドルフがまたいった、「いくつか細かい点を思い出すよ。証券仲買人は帽子と外套とを身につけ、ボストンバッグと十万フランの紙幣で膨れた財布とを携え、旅行者の身なりをしていた。実を言えば、その男は何も食物をもっていなかった。そんなわけで、良心の苛責に耐えられずに投身自殺をしたというのが関係者の意見だった。」

デストロワはもうすでに聞いてはいなかった。頭を振り、考え込んだ様子をして小さな声でいった。「今やっと彼女(あのひと)達の憂鬱が理解できたよ。貧乏なことは何でもないんだ。贅沢な環境で育って貧窮に陥ることほど大きな不幸はないんだ。」

この憐憫の情は、感情の傾斜を転がって先程の会話に立ち戻らせようとしていたので、ロドルフはそれに気づいて戦慄した。

その上、後に病気にまで悪化することになる奇妙なチックのため、ロドルフはいつも移動したい欲求を感じ、

ある場所に入っては来るものの、直ちにそこから出かける方策を考えるためにのみやって来るかのようだった。二度目には、ロドルフは人に会う約束という高度な重要性を援用し、彼が皮肉っぽく呼んでいるマックス博士の哲学のシャワー[9]から逃れることに劣らず、場所を変えることにも大いに満足して退散した。

二　主人公の横顔

ティヤール夫人が穏やかで品位のある物腰の下に押し隠そうとしても隠し切れないでいる悲しみ、この秘密の手懸りとなる一件にすっかり気を奪われたまま、デストロワはいつものように、定まった時間にリュクサンブール公園に赴いた。彼はそこでアンリ・ド・ヴィリエ[10]というもう一人の友人に出会った。その友人は、あれやこれやの理由、自分の生まれのためにせよ、悟性によるものにせよ、はたまた他の理由からにせよ、断固たる過去の擁護者を自任していた。マックスはド・ヴィリエと親交はあったが、それでも彼については、ことごとに若気の過ちを後の芳しからぬ振舞の前例として挙げるような人に負けず劣らず筋の通らない人間だと思っていた。その上、ド・ヴィリエには慈悲深い性質がまるでなく、感情が欠如しているように思われた。しかし、自分が公言する信条に適った生活を送っていることを自負していて、そうしたことから彼の所信と行為とは、いわば、誠実さの光輝を身に受けていて、デストロワもそれを評価しないわけにはいかなかった。

二人はあれこれおしゃべりをしながら、ゆっくりと天文台の小径を端から端まですでに幾度となくそぞろ歩いていた。とそのとき、二人は散歩している一人の男と行き会った。男は自分の歩いていた道を逸れて二人のところへやって来た。

「おや、クレマン[11]じゃないか！」とマックスがド・ヴィリエより先にこの新参者の傍へ行こうといきなり先に

立って叫んだ。

神秘的な本性がささやくのだろうか、ある人々を見ると、ときに明確には説明できないような耐え難い印象に突然襲われることがある。そうした人々が掻き立てる本能的反感を説明するには必ずしも彼らの外貌だけでは十分ではない。まるで彼らの生命からは、摩訶不思議な大気の流体[12]が放出されて彼らを包んでいて、そこでは人は不快を感じずには呼吸できないかのようなのである。デストロワはまさにこの種の人物に近づいて話しかけていた。中背ですらりとした体つきに頑丈な脚、筋骨逞しい腕、がっしりした胸は健康と力の観念（イデー）を呼び覚ましたが、それはすぐ、死人のような顔つきによって打ち消された。鋭い稜をもついくつかの面、深く刻まれたしわ、荒廃した様、無感動な表情は黒い森（シュヴァルツ・ヴァルト）の村々で[13]、ナイフで彫刻されるあの樅の木の人形を思わせた。赤味を帯びて映る栗色の毛髪、焦茶色のまばらな口髭、緑色の斑点のある土色の肌が全体的色調（トーン）を構成し、それは彼の顔に卑劣で有毒な外観を与えていた。ときどき、どんよりとした、藪睨みの不吉な視線が鼈甲の眼鏡のレンズを貫いていた。確かに、この顔の痘痕（あばた）と無秩序とは、まさに恐るべきある生活の傷痕そのものといえた。それ故、美しい額、はっきりとした目鼻立ち、突き出た顎――これらすべては力と叡智の印である――をもつこのまだ若い男が、どんな心的影響、思考、闘争、苦悩の結果、穢（けが）らわしい堕落の似姿と相い成ったか、これを究明することほど人の心を動かし人を惹きつける心理学的課題は他には考えつかなかったであろう。

マックスは心から溢れる気持ちを露にしてこの男の手を握った。逆に、ド・ヴィリエは冷ややかな態度を取った。前述のクレマンはといえば、このド・ヴィリエに対しては冷ややかな挨拶をするに留め、デストロワの友情には十分な熱意をもって応えた。

久しく会わなかったことに驚き、もうパリには居ないのかと質問するデストロワに対して、クレマンはぞんざいに答えた。

「いや、居るんだよ。住む世界が変わったんだよ。それだけのことだ。」
「遺産を相続したのかい。」マックスは友人の新しい、仕立ての良い衣服に眼を注いでまたいった。
クレマンの顔には不安の表情が浮かんだ。
「なんでそんなこと聞くんだい。」彼はいった。「以前より良い身なりをしてるからかい。だけど職を得たんだ、僕は生計の資を稼いでるんだ……」
デストロワは心からそのことを祝福した。
「ふん、」クレマンは頭を振っていった、「それに大変な重荷を背負ってるんだ。殆どいつも病気の女房と里子にやってる子供と返済しなけりゃならない昔からの借金と……」
「病気の奥さんと里子にやってる子供のことをいうところを見ると、」マックスは少し間をおいていった、「君は結婚したと見えるが。」
「うん、」クレマンは答えた、「ロザリと。」
「ロザリと！」デストロワは叫んだ。自分の耳が信じられないようだった。
「こんなことはありきたりのことじゃないか、驚くこともあるまい。」クレマンは冷静にいった。「それに君にはこれよりはるかに好奇心をそそることを話さなけりゃならないんだ、だけど、」とクレマンは不信と憎しみを含んだ眼付でド・ヴィリエを見ながら付け加えた、「それは長くなるだろう、時間がない。だから近いうちに会いに来いよ。いっしょに食事をしてしゃべろう。ロザリも君に再会してきっと喜ぶと思うよ。」
デストロワは、ごくごく近いうちにきっと行くといった。クレマンは自分の住所を教え、数歩歩いた所で握手をして遠ざかった。
この出会いの後、マックスとド・ヴィリエは一言もいわずに暫く散歩道を大股に歩いた。二人とも出会ったば

かりの人物について根本的に異なる見解をもつことを確信していたから、不愉快になるに決まっている議論などまるでしたくもないようだった。

しかし、不思議なことに、彼らは話さなくても両方とも相手のいうことがお互いに分かり、完全に理解し合えるのだった。だから、マックスが考えていることを思わず口に出し、クレマンに対する同情的な言葉を漏らしたとき、ド・ヴィリエの応酬は間髪を入れなかった。

「結構なことだ！」彼は厳しくいった。「あの卑しむべき人間を賞め讃える演説をまだしなければならないとは！」

「ああ！」デストロワは咎める調子でいった。

「才能もなし、良心もなし！」ド・ヴィリエは続けた、「その上、傲慢さと百の胸を腫れ上がらせるばかりの羨望。信条もなく思想もなく畜生の欲望をもったあの男は、もし法が怖くなければ、凶悪犯の中の最たるものだろう。」

「それは違うよ、」マックスは激しくいい返した。「中学（コレージュ）で彼と友達になって以来、今年と去年は別として、僕とクレマンとの付き合いは殆ど絶えたことがなかった。僕は語るもおぞましい貧窮と闘うために、クレマンがした数々の必死の努力を知っている。十六才にならずに一人でやって行かなければならず、家族もなく、無一文の彼は、修業を必要としないああしたすべての職で、やらなかったものは何一つない。順に、ある新聞の帯封折りや、校正係や、ジャーナリストや、物書きや、通俗喜劇作家や、何やかやをした。一時は、薬学を勉強しようと決意して、そのために薬剤師のところに六ヶ月住み込みで居たこともあった程だ。最後に、多分君は知らないだろう、まだ一年半にもならないけれど、退院して、見るもひどい赤貧に陥り、文字通りぼろを身にまとい、慈悲深い友達を見つけることもできず、その上、三年前から一緒に生活しているあのロザリの生活費を賄わなければ

ならなかったクレマンは、事務所の下働きとして証券仲買人のところで職に就いたのだ。これはクレマンの側では確実に勇気以上のものを要した。だから、はっきりいうけれど、堕落を理由に石を投げるどころか、その時より軽蔑すべき人間になっていないことにまさに驚こうとしているのだ。」

「まさか！」ド・ヴィリエは断乎として答えた、「僕は彼自身の誠実さに訴えたいところだ。一体全体、あの男が数々の将来の基礎をふいにしてしまったことを忘れたのか、誰よりも幸運と人間とに恵まれていたことを忘れたのか。できるものなら、彼に尽くした数多くの人のうちで、彼が離反させなかった人を、たった一人でも挙げて頂きたいものだ。しかも、離反させたのは乱脈によってではなく、他人（ひと）に対する恥知らずな行為そのものによるのだ。それに、手玉に取れる人が見つからないとき以外は、仕事に頼ったことがないことは公然の事実じゃないか。しかもそれだけじゃない！　利己主義、虚栄心、羨望、憎悪にはち切れそうで、本当に他人（ひと）を助けることはできず、友達をもつといえば必ず不当に利用するためでしかなく、その生活はといえば官能と才気とのまさに絶え間ない濫用三昧でしかなく、それだけじゃ十分じゃなくて、さらには悪事のため以外には徹頭徹尾寛容さを欠き、他人の欠点に対してはいつも決まって冷酷な批評家であるところを示してきたのだ。それなのに、堕落を嘆き同情することはまだしも、いってみれば彼の美徳に恍惚とするなど、腹立たしいにも程がある！」

「君は同様に情熱がかなり大切なものだとも思っていないのだ。」

「情熱だって！　……我々には情熱がある結果それと戦わなければならないのだ、野獣に倣ってそれに身を委ねてはいけないのだ。」

「結局のところ、」とマックスは語を継いだ、「我々の世代の他の多くの若者達がもっと小さな規模でやっていること以外に、クレマンが何をしたというのだ。どれほど多くの若者が、彼の中で開花している悪徳の芽を自らの裡に蔵していることか、そしてどれほど多くの若者が、ただ単にクレマンと同じ力と強い個性と大胆さとをも

ち合わせていないというだけの理由から、彼ほどの途方もない過ちを犯さずにすんでいることか！」

「勿論、僕も同意見だ、」ド・ヴィリエはぶっきら棒にいった。「君のクレマンは僕が間近に見ているただ一人の人間じゃない。彼は僕にとっちゃ衝撃的な現代性の一つの典型なのだ。遠くを探さなくても、彼の中には実に、悪徳と偏見と懐疑的態度と無知と、あの放浪芸術家達[14]の精神とが凝縮され要約されているといえるだろう。その放浪芸術家達の浅薄な物語[15]は、君の友達のロドルフの野望を満たしているようだが……」

三　証券仲買人の死に関して

翌日の午後、デストロワは、ただそこで音楽をすることだけではなく、他にいくつかの気懸りに心を奪われながら、階下の隣人の家へ降りて行った。控の間を通り抜けながら小さな台所の半開きの扉から、フレデリック爺さんがかまどの炭を掻き立てているのが目に入った。母と娘はいつもどおり愛情を籠めていそいそとマックスを迎えた。

マックスがロドルフとの会話でティヤール夫人[16]の驚くべき美しさをたいそう控え目に話したことは注目すべきである。恐らくは自分の烈しい熱心さが友人に何か皮肉でも思いつかせはしまいかと心配したのだろう。夫人は背が高く、かといって高すぎもせず、すらりとしているばかりか、類稀な肩をもち、喪服がそれをさらに美しく見せていた。温かみのある白い瓜実顔は申し分のない端正さを示していたが、かといってイギリス女性の顔に何か非常に冷たいものを与えるあの気難しく確固たる線はいささかもなく、その肉付きは豊かで穏やかで調和が取れていて、そこには探そうとてしわ一本の翳も見つけられなかったろう。黒い眼の視線には稲妻の力があった。微笑むとほんのりと黄金色がかった歯の象牙質が幾分厚めの口唇の赤味によく映えた。夫人は自分の魅力を、例

えば、褐色の毛髪の魅力を恥じらっているかのようで、その見事な豊かさを無益に隠そうと努めていた。ふんわりとしたレースの下に瀟洒に埋められた白い手や、ドレスの陰影が恋々として守っている足の優美な曲線の魅力をも同じように恥じらっているかのようだった。その上、動きはすべてがしなやかさと優雅さであり、足の先から毛髪の先端まで、その容姿からは文字通り止めどなく魅力が流れ出していた。彼女を見たとき、人にできる最小限のことが彼女を愛することだったとして、楽の音のような好ましい声音を聞いて、この愛が熱愛にまで達しなかったならそれこそ奇跡だった。

もう一人の女性、絹の房にも比べられる白い巻毛に囲まれた厳かな美しい顔、そして泉のように善良さの湧き出る眼のもう一人の女性はまさしくティヤール夫人の御母堂だった。デストロワは、デュコルネ夫人についてそれ以上何ひとつ付け加え得ない賛辞を一言でいい表わしたものだった。「それは、」と彼はいった、「年齢（とし）のとり方を知っているああした稀に見る女性の一人、自分の母親がもはや存命しないとき、母になってくれたらと思うような女性の一人だ。」

ティヤール夫人はピアノの前に腰をかけ、マックスはヴァイオリンの調子を合わせた。二人は、この二つの楽器のためのベートーヴェン[17]の偉大なソナタの一つを演奏した。デストロワにはゆったりとした奏法と力強さとがあり、当然それは演奏の緻密なできばえを大いに損なっていた。しかしマックスには稀に見る長所、感じとる長所と楽器が彼自身の一部かと思われるばかりにヴァイオリンと一体になる長所とがあった。アンダンテを演奏した全く例外的な奏法は、予め熟慮された細部に対するあのこだわり――これは演奏家を香辛料のきいた軽業師の水準に落としてしまうのだが、――がなかったにもかかわらず、やはりティヤール夫人に大変強い感銘を与えた。

「何て素晴らしいこと！」熱狂的に夫人は叫んだ。

マックスの心は夢想に横溢していた。

「ええ、」彼は小さな声でいった、「この人は僕らの時代の真の詩人です。僕らの心の葛藤を予見し僕らの悲惨を慮って作曲したと断言してもよさそうです。穏やかで深みのあるハイドンと比べると、最初、この作曲家はたいそう騒々しく憂鬱に思われたに違いないと想像します。今日では、その作品は僕らに重くのしかかる様々な不幸に対処できる慰めの尽きせぬ泉となっています。言葉以外の方法で彼の作品を称賛できる人は何と幸せなのでしょう！　彼自身こういいました、『私の音楽を十分に感じられる人は他の人達が引き摺っている悲惨から永久に解放されるだろう』と。」

ティヤール夫人とデストロワがソナタを終えようとしているとき、フレデリック爺さんは家にいてちょうど出かけようとしていた。完全に禿頭で、ひげはいつも剃りたてのまだかくしゃくとしている痩せた小柄な男で、その顔には犠牲への情熱と呼ばれるものが輝いていた。マックスは、彼が白ネクタイをして、小さな襟の付いた同じ青いフロックコートと同じグレーのズボンを身に着けているのをいつも見ていた。この老爺はあらゆるものに一瞥をくれ、必ず母娘に慎ましく暇乞いをして立ち去るのだった。質問したい欲求に燃え立っていたデストロワは後を追って、間もなく、まるで偶然ででもあるかのように追い付いた。

フレデリック爺さんはマックスを特に好いていて、この情況を明らかに喜んだ。彼はポケットから取り出した柘（つげ）の丸い嗅ぎたばこ入れの上に袖を往き来させ、デストロワに勧めた後で、どっさりたばこをつまみとって香りを嗅いだ。デストロワは秘密を話させるために少なくとも無用な回りくどい言い方をした。フレデリックはとても口が堅かったが、フランス全土に新聞がいい広めた事件のいくつかの要点をいわずにおくことなど考えてもいなかった。悲しみに沈んだ様子をして、手厳しい言葉で、老爺は事件の特筆すべきいくつかの局面をざっと語った。すでにずっと以前からフレデリックはデュコルネ氏に仕えていたが、とき恰かも、まだ青二才のティヤールが、物の数にもならないささやかな資格でそこに勤めに入ったのだった。魅力的な外貌、勤勉さ、早熟な取り引

きのセンス、とりわけ稀に見る如才なさのためにティヤールはあっという間に主人の厚意を勝ち得た。この厚意を利用しようという野心に身も心も打ち込み、彼は最初の出発点から見れば自分自身をさえ驚かせたに違いない道を歩んだのだった。十年とたたない間に、せいぜいその半分の年月を事務長の地位を得るのに費やした後、無一文でデュコルネ氏の共同経営者となり、次には娘婿、ついにはその後継者となった。そこまでは、なるほど、これ以上法に適ったことはなかった。しかし、この一家の資産額の大きさを考えただけでも、娘婿というものには、いくらかの長所はさておき、それ以外の全く別のものが求められて当然だった。だがそんな家族に対して、ティヤールはいかに振る舞い、いかにして借りを返すことになったのか。

義父は死んだ。この死がティヤールに及ぼした影響を観察するならば、それはまるで永い厳しい懲役の後で、重い鎖を解かれた男のようだった。過去の美徳のすべてはまさに途切れることのない偽善そのものだったのだ。今では、最も悪しき諸本能、測り知れない一種の利己主義に加えて、成り上がり者の歯止めのない虚栄心と、思いがけない富の輝きが惹き起こした眩暈（めまい）とを付け加えなければならなかった。洞察力のすべてを失うほどこの男に心酔していた妻と義母は、絶えず欺かれ犠牲になり続けた。この二人の女性は彼の乱脈を知るには最も不適当な人達であり、破滅的な贅沢を除けば、咎め立てすることなど微塵（みじん）もないと最後まで信じていた。ところが、ティヤールはこの二人に相変わらず同じように熱心に尽くし、同じように汲々として気に入られようとしているかに見せかけてはいたものの、その思いは自分の妻と家庭とからますます遠ざかっていったのだ。彼はつまらぬ虚栄心から、鮫が船の周りをたむろするように、ありとあらゆる種類の企業家が周囲にたむろするあの寄生的金利生活者達の世界に誘い込まれ、自力で財産を築いたのではない人とか、余りにも早く財産家になった人と同じような金銭に対する無頓着さで、こうした世界のあわれな栄光を買ったのだ。賭け、貪欲な高級娼婦、並はずれた乱費、そして程なく高利の犠牲（いけにえ）となり、四年間のこの度を過ごした所業に続いて、事業の行き詰まりから断固た

る根本的な緊急措置がどうしても必要になったとき、にっちもさっちもいかなくなって無謀ないくつもの投機に身を投じ、取り返しがつかないまでに完全に自分の立場を危うくしてしまった。そしてついには、自らに対して抱かれた疑念、ぐらついた信用を眼の前にして、奇跡でも起こらなければ、どうやって破産を回避できるか見込みを立てることはもはや不可能だった。

「私がどんな不安の中で生活していたかはご想像にお任せします、」フレデリックは続け、ここで再び指を嗅ぎたばこ入れに突っ込んだ。「デュコルネ夫人とそのお嬢様は、何が起ころうとも、いつもあの方達個人の財産という頼みの綱をもってらっしゃると考えて、私は少しばかり慰められていました、これは本当なのです。ですから、恐らくはすでに逃亡の手筈を整えつつあったティヤール氏が、夫人と義理の母親の財産を当てにし、あの方達を双方ともにまさしく剥ぎ取ろうと計画していることに気付いたとき、私はどんなになったことでしょう。おお、私はもう悪魔どころではありませんでした。それに過去三十年間の奉公のお陰で、それでも家ではいくらかの権利が与えられていました。私は逆上してデュコルネ夫人とお嬢様に、ティヤール氏が数百万では埋められないだろう底知れぬ穴をあけてしまったと本当のことを申し上げ、ご自身を憐れんで下さいと手を合わせてお願いしたのでした。しかし、どうだか！　妻に熱愛され、その妻には自分が信じさせたいことを信じさせている若い男、優秀で、才気煥発な美青年と比べたら、この私に、たわごとをいうこの老いぼれの私に何の力があったというのでしょう！　ティヤール氏はいつもの芝居を演じ、これまでになく妻を愛している振りをして、ついに二人の女性の盲目的な弱みに付け込んで必要ないくつかの署名を奪い取ったのです。」

「何たる卑劣漢だ！」憤慨したマックスはいった。

「そうなんです、卑劣漢です、確かに。」老人は頭を振り振り付け加えた、「しかも、あなたが考えていられる以上にです。それに、表面的な長所があり過ぎて心の底が悪くなるのです。人間、何もかもをもつってわけには

いかないものです、なんてこってす。あの男にまるで情が無いことが分かったのがこのとき初めてというわけではありません。とても辛い不自由な目に耐えて彼に何ものかを教えようとしてきた極貧の身内の許をあの男は去ろうとしていたのです。いやはや！　あの男は極貧の身内を恥じ、彼女達と縁を切り、家に閉じこめて、貧窮の中に放って置いたのです。この禄でなしは自分に善を施したり自分を愛する人々を憎む以外に適性をもっていないようでした。ティヤール夫人を、美と愛と献身の化身を、不誠実で、しばしば醜くて、ときには婆さんで、その品行たるや必ずぞっとするばかりの女達のために見捨てたのを、他にどんな風に説明できましょう。しかも、その女達たるや、彼の物を盗み、破産させ、嘲弄していたのです。」

「しかし、」と突然、マックスがいった、「そんな男がどこで自殺するなどという勇気を得たのでしょう。」

フレデリックは驚いて立ち止まり、マックスを見やった。

「それこそ私が一度ならず自身に問いかけた問題なのです。」腕組みをして彼はいった。彼はまた歩き出して後を続けた。「財布にあった物が、ティヤールが受け取ったばかりの総額と比べて、ほんの僅かだったことを別にしてもです。私が知っているあの男の性格からすると、悔恨の念に捉えられたと認めるのは大そう難しいのです。結局のところ、隠し立てはいたしません、この自殺は私にとってはずっと謎なのです。」

デストロワがすぐ様次のように叫んだ様子の中には心配よりもむしろ驚きと好奇心の方が強く示されていた。

「信じてはいらっしゃらない……」

「ええ、ええ、」老人は考え込んで繰り返した。「けれど、私の眼より確かな眼の司法警察がこの死に何らいかがわしいものを見なかったのです。」

「それに、」とマックスが付け加えた、「あの男が逃亡しても死んでも全く同じことでした。というのも、ティヤール夫人とその母親とはいずれにしても決定的に破産したのですから。」

「確かに。」とフレデリックはデストロワに別れを告げようとしながらいった。「しかしこういうことなんです、驚きますね。」ここで老爺はいかにも有能な様子をし、どっさりつまんだ嗅ぎたばこを陶然（うっとり）として嗅いだ、「こうしたことをすべて考えると、天に在（ま）します神様は何をしておられるのかと自問したくなります！　……」

（続く）

註

＊　本稿の拙訳には、KAMEYA, Nori, *Un conteur méconnu, Louis-Charles BARBARA*, Univ. de Nice, 1983 (thèse), t. II, *Anthologie et Documents* に収められた *L'Assassinat du Pont-Rouge*, Hachette, 1858 のヴェルシオンを採用した。本来ならば一八五五年一月一日と十五日に *Revue de Paris* に掲載された最初のヴェルシオンを用いるべきかもしれないが、訳者が最良のものと考えるヴェルシオンを採用し、異文については同様にテーズに収録した異文のうち特に重要と考える部分の翻訳を、本文の最後尾に掲載することとする。なお註についても、多くはテーズの註を取捨選択し、その後に、新しくわかった事柄、見解を付け加えた。

なお、バルバラの生涯と作品については次に記した *KLCB*, *KCB* 及び拙稿「バルバラとボードレール」（『三田文学』、夏季号、平成二年）、「ある名演奏家の生涯の素描」（『慶應義塾大学日吉紀要、フランス語フランス文学』三十六号、平成十五年三月）を参照して頂きたい。

＊＊　略記号

○ *KLCB* : KAMEYA, Nori, *Un conteur méconnu,* Louis-Charles BARBARA, Univ. de Nice, 1983(thèse).

○ *KCB* : KAMEYA, Nori, *Un conteur méconnu, Charles BARBARA, 1817-1866*, Minard, Paris, 1986.

○「鍵」……亀谷乃里、「Ch. バルバラ、『赤い橋の殺人』—〈鍵をもつ小説〉解読の覚え書—」、『慶応義塾大学日吉紀要、フランス語フランス文学』、三十二号、平成十三年三月。

1 この小説は、シャンフルリ、ミュルジェール等、自称〈レアリスト〉達の作品の多くと同様に、事実や実在人物が作品中の事家や登場人物のモデルとなっている。〈赤い橋〉(Pont-Rouge) は小説以前に実在した橋で、サン・ルイ島の先端、サン・ルイ島とシテ島とを結ぶ点、ブルボン河岸の延長上にあった。一度流され、一七七一年に再構築され、鉛丹塗装された歩行者のみが通れる小さな赤い木の橋であった。「赤い橋の殺人」が劇化されゲテ座で上演された際(一八五六)、テオフィル・ゴーチエもこの〈赤い橋〉を回想している(V. « Revue dramatique», Le *Moniteur universel*, 7 juin, 1858)。*KLCB*, t. I, pp.86-87; *KCB*, p. 61, 及び「鍵」参照。

2 ロドルフのモデルは『放浪芸術家の生活情景』(原タイトルは、「放浪芸術家情景」註9を参照。)の作者、アンリ・ミュルジェール (Henri MURGER) である。『放浪芸術家…』の中でバルバラを Carolus Barbemuche〔barbe (ひげ) と barbare (粗野な) とをかけ、muche (若い娘に声もかけられない恥ずかしがりやの青年) とで合成した名詞〕という滑稽な名で登場させてからかったミュルジェールに対して、バルバラは自らのこの作品中で度々大変不名誉な役割を与えてお返しをしている。(後出、十章も参照) なお、ここに描写された容貌はカバネス医師のミュルジェールに関する記述とも一致する。«〔en〕1838, Murger est âgé de seize ans. C'est alors un gros garçon, imberbe, joufflu, rosé, dont la ronde structure, plutôt boursouffl ée que charnue, laissait deviner un tempérament lymphatique. “ Ses yeux bruns étaient bien ouverts et regardaient tout autour de lui avec une placidité naïve”»(Docteur Cabanès, *Autour de la Vie de Bohème*, Paris, 1938). *Cf. KLCB*, t. Ⅱ, p.526; *KCB*, « 2. L'Assassinat..., §. Conception du roman, 1. Roman à clefs... »

3 マックスのモデルはこの小説の作者バルバラ自身である。作品中の肖像はシャンフルリが『若き日の回想と肖像』の中の「不遇の物語作家」の冒頭で紹介しているものと一致する。« Des yeux bleus ardents et soupçonneux, une barbe blonde, des vêtements modestes, rien de remarquable dans la personnalité, sauf quelque roideur, donnaient à l'homme quelque parenté avec la race allemande ; mais chacun devait être frappé de ses terribles yeux vifs qui, suivant un mot de Nadar, ressemblaient à ceux d'un sphinx gardant un trésor.»（Champfleury, « Un conteur méconnu», *Souvenirs et portraits de jeunesse*, Dentu, Paris, 1872/ Genève, Slatkine Reprints, 1970, p.193.） 友人の写真家、ナダールが撮影したバルバラの写真（v. *KLCB* ; *KCB* 及び「鍵」）がそれを確証する。

4 マクシミリアン・デストロワは、原文では、Maximilien Destroy。

5 子供のダンス。

6 バルバラはパントマイムに強い関心をもっていた。この一文とびっくり箱云々の条りなどはその現れである可能性がある。

7 『パリ評論（ルヴュ・ド・パリ）』誌のマクシム・デュカンは彼の『文学的回想』（*Souvenirs littéraires*）の中で、貧しい頃にバルバラは夜小さな劇場のオーケストラに入りこんでヴァイオリンを弾いていたと回想している。また、バルバラはシャンフルリ、シャンヌ、未来のリリック座のヴァイオリン奏者オリヴィエ・メトラらと学生や女工（グリゼット）を前に四重奏のコンサートを催したこともある。V. *KCB*, «l. Notice bio-bibliographique», p.13.

8 ブレダ街は長い間、パリの粋な社会の中心であった。

9 ミュルジェールは彼の「放浪芸術家情景（セーヌ・ド・ラ・ボエーム）」（一八四六年から四九年にかけて『海賊（コルセール）』紙、『海賊（コルセール）＝悪魔（サタン）』紙に掲載された）の中でバルバラ=Carolus Barbemuche を大変「醜男［で］プラトン派（フィロゾフ・プラトニシアン）の哲学者」であるといってからかっている。他にも処々にバルバラが哲学者といわれる由縁をもつ箇所が多く見られる。実際、『赤い橋（ポン・ルージュ）の殺

人』も哲学に心理学を融合させたバルバラの哲学的特性を強く持った作品である。

10 アンリ・ド・ヴィリエ（Henri de Villiers）のモデルは詩集『女像柱（カリヤティッド）』、『鍾乳石（スタラクティッド）』の作者で、〈芸術のための芸術（ラール・プール・ラール）〉の旗手、テオドール・ド・バンヴィル（Théodore de Banville）である。無論、バルバラの友人であり、彼は〈ラ・ボエーム〉のグループに属してはいなかったが、ボードレールと同じようにこのグループの人々と繁く交流があり、自称レアリスト達の中心的な活動の場、『海賊（コルセール）』紙、『海賊（コルセール）＝悪魔（サタン）』紙に寄稿していた。小説のこの部分は、バンヴィルが貴族階級に生れたことへの仄めかしから始まり、古代ギリシャの彫刻美への傾倒、古（いにしえ）に対する偏愛と、彼が非情なばかりの作詩（メトリック）の技法家でそれに過大な価値を与えていたこと、一言でいえば古典的形式美への偏向と芸術至上主義に対する揶揄であることは明らかである。また、ひとえに豊かな韻を作って楽園に回帰しようとし、人間の「血の沼」、「泥の深淵」に身をかがめて不幸を共有しようとしないいわば冷酷さへの批判でもある。人類の不幸を共有し、「真実の探求」と「誠実」を文学の道と考えた一人の自称〈レアリスト〉、バルバラと高踏派の詩人との文学的・美学的立場の対極的位置が窺える（「鍵」参照）。一方自称〈レアリスト〉の首領、シャンフルリも『マリエット嬢（マドモアゼル・マリエット）のアヴァンチュール』でド・ヴィレール（De Villers）という名でバンヴィルを登場させ酷評している。「ド・ヴィレールは情も涙もない、彼の詩の一行一行はそれを証明する。」といった具合である。« De Villers n'a ni cœur ni sentiment : chacun de ses vers le prouve.» (*Les Aventures de Mademoiselles Mariette*, nlle éd., 1859, in-12, p.167.（Marcel A. RUFF, *L'Esprit du Mal et l'Esthétique baudelairienne*, Armand Colin, Paris, 1955 に拠る）

11 クレマンは原文では、Clément（慈悲ある、の意）。

12 〈摩訶不思議な大気の流体〉はアントン・メスメールの「動物磁気」説を思い起こさせる。バルバラはすでに一八四六年に、« Le rideau»（*L'Artiste*, 24 oct. 1846）の中で、カーテンの向こう側の見えない魂と語り手の魂と

の間の磁気流体による愛を物語っている。

13 〈黒い森（シュヴァルツ・ヴァルト）〉の町々は木製細工、時計工業、繊維工業が盛ん。シャルル・バルバラの父が生れたダウスナウは〈黒い森（シュヴァルツ・ヴァルト）〉から遠くなかった。

14 ネルヴァルも出入りしたドワイエネ袋小路に集った一八三三年の〈青年フランス派（レ・ジュヌ・フランス）〉の放浪芸術家（ボエーム）達とは区別される。シャンフルリ、ミュルジェール、画家のアレクサンドル・シャンヌ、クールベ等カネット通りに集った放浪芸術家（ラ・ボエーム）達。前者より感受性の強い若者達で、貧しく、家具もない屋根裏部屋に住んで、自由奔放な文学・芸術生活を送った。自ら〈レアリスト〉を称する彼らは、シャンンフルリを首領に、「真実の探求」、「誠実さ」を標語に掲げそれまでの理想主義的なロマン主義に反旗を翻した。この〈放浪芸術家（ラ・ボエーム）〉のグループには後出、十章の「音楽の夕」に見られるように『悪の華』の詩人、ボードレールも親しく出入りした。

15 ミュルジェールの『放浪芸術家（ボエーム）の生活情景』。彼は軽妙洒脱な筆致で彼の文学・芸術仲間達の生活を描いた。

16 ベートーヴェンのピアノとヴァイオリンのためのソナタを演奏し、マックスとしばしば二重奏をするティヤール夫人は、幾分かは、バルバラの親友ジャン・ヴァロン（Jean Wallon= 哲学者、政論家）の夫人がモデルである可能性もある。ピアノを弾いた夫人とバルバラはシャンフルリらとともにしばしば三重奏、四重奏を演奏し、その辺りの事情はシャンフルリの『シュニゼルのトリオ』（«Les Trios des Chenizelles», *Revue de Paris*, avril et mai 1852）に述べられている。SCHANNE, Alexandre, *Souvenirs de Shaunard*, Paris, 1887, p.193 をも参照。

17 ベートーヴェンはバルバラが熱狂的に愛した大作曲家であり、その傾倒ぶりは他の作品中にもしばしば窺える。「ある警察官の報告抄」（«Extraits des rapports d'un agent de police» in *Histoires émouvantes*, 1856）、「ある名演奏家の生涯の素描」（« Esquisse de la vie d'un Virtuose» in *Mes Petites Maisons*, 1860）等。シャンフルリ等との四重奏団のレパートリーにベートーヴェンを取り入れたのはバルバラであった（Champfleury, *Souvenirs...*）。